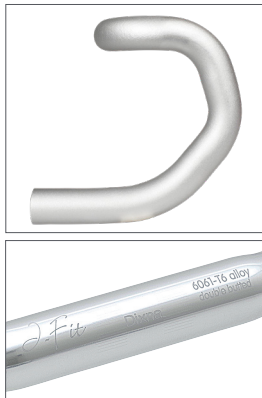


# 月刊 サンエスウォッチング Vol.23

## はじまりは「ジェイフィット」から

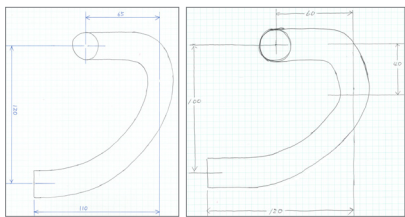
Handle…手で自転車を操縦する場所



▶ MTB ブームの終息に代わり 1990 年代後半から押し寄せた「ロードバイク」の潮流。スポーツ自転車への認知度が国内で大きくステップアップし始めた時期でした。ロードレーサーがロードバイクと表現され、ロードにはドロップハンドル、という訳でしたから、ドロップハンドルの自転車が激増しつつあったわけです。そんな渦中の 2003 年、当社ではロード系スポーツブランド「Dixna (ディズナ)」の立ち上げから 4 年が経過した頃でした。

▶ ディズナの製品開発の中で「ロードバイク」に乗っていて何か不都合なことはないか? にテーマを置き、ドロップハンドルでのつらいブレーキ操作としんどいポジションに着眼しました。当時フレームもハンドルもレバーも小柄な日本人に親切とは言えない設計でしたので、特に小さい手では安全にスムーズにブレーキ操作できない、や、たまには下ハン持ちたいけど無理といった声が多く、これをなんとかしようと、まったく新たなドロップハンドルの設計を始めました。

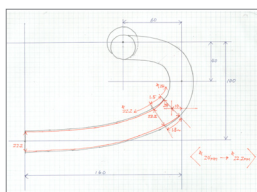
▶ ハンドルは自転車部品の中で、単純でありながら手に触れる複雑繊細な部位です。ほんの少しの長さ、曲がり角度で使用感が劇的に変化します。要するに入念に作り込めば不都合を解決してくれる部位でもあるのです。当時の主な構成部品を想定し、小柄でも扱いやすいハンドルを描き図面化します。ところが直ぐに大きな壁に対峙します。当時主流であったアルミ素材のハンドル曲げ加工は、この入念な作り込みを施した「考案者の勝手な」設計に対応できなかったのです。依頼していた協力工場は自転車ハンドル製造で世界トップの実績がありました。工場現場の技術者と、時に分かり合い時に喧嘩になり更には絶交寸前になりかけながらも、熱意によって互いの理解力と工場の技術力を高めた結果、1 年半後によく完成したのです。



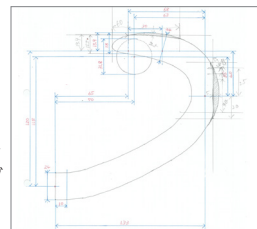
左はジェイフィット最初期アイデア。右は次モデル「ジェイフィット モア」のアイデア。2005 年当時ほぼなかった幅に合わせサイズを変える設計を行いました。今や少数派のアナミックながら多くの方々に愛用され続けています。

▶ 完成したハンドルの名前を考えました。つまりこれは日本人に合うことを設計テーマとしていたんだ、という思いから「日本人にフィットするもの=ジャパニーズフィット」で・・・「ジェイフィット J-Fit」となったのです。この時に「ジェイフィット」という名称をはじめて使いましたが、この時に、その後続く当社オリジナル製品の根幹となる本質「ジェイフィット」の姿が誕生したのでした。

▶ その後ジェイフィットはシリーズ化し、派生モデルやカーボンモデルも作り、初心者からオリンピック選手まで多くの皆様に使用いただける製品となりました。更に、この開発設計の動機を本質的考え方として、その後、サドルやクランクやペダル(詳細は Vol.8.9)、フレームやフォーク(詳細は Vol.2.3、Vol.13.14)やシステムなど、ブレーキレバーに至るまで、いろんなアイデア製品を生み出すことになります。



左は今や人気の DixnaCross バンディー。2010 年のモデルでジェイフィットを設計基本としており、その後これを基に多くのクロス&グラベル系ハンドルが生まれています。当時は「ハの字型のセミドロップハンドル」と表現していました。(写真は最新のバンディー 2)



右はカーボンモデルの OnebyESU「グランモンロー」。シリーズ 3 度目のマイナーチェンジモデルでドロップ先端をカットした FZ「フィットゾーン」機能を採用しています。ブレーキブラケットとハンドルの隙間を広げる数ミリの快適機能です。現在は軽量化された「グランモンロー SL」となっています。

▶ 着眼と形状アイデアはなかなか保守することは出来ませんし常に似た製品がすぐ後から出てくる時代です。当社はカタログで詳細寸法を明らかにしていますが、ジェイフィットの本質まで似せられた製品は存在していないように思います。



現在ジェイフィットを基とするハンドルはアルミ、カーボンと派生を含めると 30 種近くあります。今年発売のカーボン最新モデル OnebyESU「マホラ・マホラスエヒロ」はようやく最終テストを終えました。いずれ詳しく掲載いたします。上も下も、とても快適です。

## VIVA

～自転車万歳！！～ (連載コラム: 全 12 回)

【第 8 回】

1970 年代後半に発売の車輪カバー「シームレスホイールカバー」。当時簡単に被せられる車輪カバーが欲しい、との要望から生まれました。ポリエステルで伸縮性があり、すっぽり収まり、ロードレーサーのチューブラーホイール保管に大変重宝したようです。スプロケットカバーも付いていました。現代の要望は、カーボンとかの車輪を傷つけず他のものを汚さずに屋内でも移動中でも簡単にしかも自転車にホイールがセットされた状態でもすっぽり収まるカバーが欲しい、というもの。ホイールカバーは VIVA から grunge (グランジ)「スリットタイヤカバー」として蘇りました。グランジながら名称が VIVA っぽい? アイデア商品です。



● 次回、月刊サンエスウォッチング Vol.24 は 2020 年 6 月 12 日(金)の配信予定です。

TOKYO SAN-ESU CO.,LTD.